

## 奄美德之島山方言のアクセント：名詞アクセントを中心に

橋尾, 直和

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

62

(終了ページ / End Page)

71

(発行年 / Year)

1988-11-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012641>

# 奄美徳之島山方言のアクセント

——名詞アクセントを中心に——

橋 尾 直 和

## はじめに

現在、琉球列島全体において方言音声の典型的な形は崩れ、様々な変種が混在する状況を呈している。調査した奄美徳之島山方言は、徳之島方言の中でも古色を残すものとして知られている。しかし、この山方言のアクセントも、先の状況下において次第に変容を遂げようとしている。ここでは、その変容過程にある山方言のアクセントの実態を明らかにしたい。

## 1. 目的と方法

本論文は、調査対象を壮年層（60歳代）のインフォーマントにしほり、従来の研究成果と比較しながら、現在のアクセントがどのように変容しているのかを明らかにし、今後のアクセントの動向を探ることを目的とする。

調査は、1984年12月に徳之島町山に赴き、面接調査法によって行った。調査項目には、金田一（1974）所載の「付表8」を活用した。インフォーマントは、現地在住の保岡啓良氏（1921年生）である。

保岡啓良氏は、山に生まれ、南洋群島テニアン小学校を卒業後、東京帝京商業学校を4年中退、1943年から山小学校で教員を勤められ、1983年4月に退職された後も山を離れて生活したことのない、生え抜きの人である。

## 2. 従来の研究

山方言のアクセントを直接扱ったものは見当たらないが、徳之島の他方言について論及したものは、何点か挙げるができる。

ここで、まず徳之島方言を奄美群島諸方言の中に位置づけ、アクセントについて論及したのを掲げてみる。

服部（1959）、服部・上村・徳川（1959）では、大島群島方言の名詞アクセントは「第四種アクセント」まで4つに区分することができ、この中の「第一種アクセント」が徳之島全島の諸方言のアクセントとしている。

具体的に言えば、大島群島諸方言の2音節名詞アクセントについて考察した結果、徳之島方言のアクセントは、大分市方言のアクセントとほとんど同様のもので、琉球方言諸方言祖形の2音節名詞のアクセントと見なしている。

その表を示せば、次の通りである（●は○より高い記号・▶・▷は助詞を示す）。

第 1 類	}	○●～○●▶型	}	語例 「風」～「風の」（「戸」～「戸の」）
第 2 類				同 「橋」～「橋の」（「毛」～「毛の」）
第 3 類	}	○●～○●▷型	}	同 「花」～「花の」（「手」～「手の」）
第 4 類				同 「息」～「息の」
第 5 類	}	○●～●○▷型	}	同 「影」～「影の」
				同 「影」～「影の」

以上のことから、徳之島方言のアクセントの母体系は、名義抄式アクセントとの対応関係から、（1・2類）（3類）（4・5類）の三型アクセントであることがわかる。

次に、徳之島諸方言を典型的に三類に区分し、アクセントについて論及したものを掲げたい。

崎村（1981）・（1982）・（1983）は、徳之島方言を、南部方言・北西部方言・東部方言に区分し、それぞれ伊仙町目手久方言・天城町松原方言・徳之島町亀徳方言のアクセントの実態について述べている。ここでは、目手久方言を除く二方言を、三型アクセントと見なしている（ただし、インフォーマントは目手久方言のみ青年層である）。

上記の区分に従えば、山方言は北西部方言に位置づけられる。これと同じ区分の天城町松原方言のアクセントについて、崎村（1982）では、モーラで表した際の名義抄式アクセントとの対応関係を、次のように示している。

1 類・2 類	:	○●～○●▶
3 類	:	○●◐～○○▶
4 類・5 類	:	●○～●○▷

松原方言についても、（1類・2類）（3類）（4・5類）の三型アクセントであることがわかる。

### 3. 調査結果

山方言の名詞アクセント体系を示せば、次の表のとおりである。東京方言の2音節名詞に当たる語が、母音を引いて長めに発音される（長音・半長音）のを2音節と解釈する（ここで言う音節とは、モーラ＝拍を表す）。これらの語のアクセントの反省的型を（○○、●●）のように表す（●は○よりも高い記号）。▷・▶は、東京方言などの主格の助詞「が」に相当する、琉球方言の主格の助詞 nu である。（ ）は反省的型を表す。以下に語例を示す。

表-1 山方言の名詞アクセント体系表

## I. 2音節型

((●●、●●▶))

[ʔk²waʔ] (子)、[ʔsɪ:] (瀬)、[ʔtʃ²ɾ] (血)、[ʔ\*hu:] (帆)、[ʔha:] (葉)、[ʔsui] (日)、[ʔmu:] (藻)、[ʔjaʔ] (矢)、[ʔdu:] (尾)、[ʔsusu] (裾)、[ʔta:] (鷹)、[ʔde:] (竹)、[ʔtui] (鳥)、[ʔhai] (灰)・(蠅)、[ʔhui] (笛)、[ʔmo:] (桃)、[ʔmui] (丘)、[ʔjai] (槍)、[ʔkoʔ] (川)、[ʔsu:] (下)、[ʔtʃ²uʔ] (人)、[ʔsa:] (足)、[ʔ²w/ʔ] (上)、[ʔ²juʔ] (魚)、[ʔk²wan] (棺)、[ʔt²ai] (二人)

((●●、○●▶))

[ʔkui] (頸)

((○●、●●▶))

[ʔiʔ:] (柄)、[kaʔdza] (香)、[ʔuʔ:] (緒)、[naʔ:] (名)、[huʔdi] (筆)、[ʔuʔta] (歌)、[ʔuʔtu] (音)、[niʔʃi] (北)、[taʔbi] (旅)

((○●、○●▶))

[ʔaʔku] (灰汁)、[ʔaʔmi] (飴)、[ʔaʔmi] (蟻)、[ʔiʔkja] (鳥賊)、[ʔuʔʃi] (牛)、[juʔda] (枝)、[ʔiʔbi] (海老「)、[kaʔsa] (瘡)、[kaʔdi] (風)、[gaʔn] (蟹)、[kaʔni] (金)、(鐘)、[kuʔbi] (壁)、[tʃiʔra] (顔)、[kaʔma] (釜)、[kiʔdʒi] (疵)、[kiʔri] (霧)、[k²uʔgi] (釘)、[kuʔri] (此)、[kʏʔʃi] (口)、[kʏʔʃi] (腰)、[saʔki] (先)、[saʔki] (酒)、[saʔba] (鮫)、[saʔra] (皿)、[ʃiʔna] (品)、[ʃiʔki] (鋤)、[suʔdi] (袖)、[taʔki] (滝)、[gaʔra] (竹)、[taʔʃi] (竜)、[taʔna] (棚)、[tʃiʔʃi] (筒)、[tʃiʔmi] (爪)、[tuʔra] (虎)、[ʔiʔri] (西)、[nuʔno] (布)、[nuʔki] (軒)、[haʔku] (箱)、[haʔʃi] (蜂)、[ʃiʔgi] (髻)、[ʃiʔdʒa] (膝)、[ʔiʔma] (暇)、[saʔba] (鱗)、[huʔta] (蓋)、[huʔda] (札)、[hyʔʃi] (臍)、[miʔʃi] (道)、[miʔdzi] (水)、[muʔʃi] (虫)、[muʔmi] (粃)、[juʔmi] (嫁)、[taʔru] (誰)、[duʔʃi] (友)、[kaʔja] (蚊帳)、[juʔka] (床)、[juʔri] (百合)、[juʔku] (横)、[ʔiʔʃi] (石)、[kaʔki] (垣)、[kaʔbi] (紙)、[tʃiʔru] (弦)、[haʔʃi] (橋)、[haʔta] (旗)、[ʃiʔdʒi] (肘)、[ʃiʔru] (昼)、[huʔju] (冬)、[muʔni] (胸)、[muʔra] (村)、[juʔki] (雪)、[tuʔdʒi] (妻)、[naʔʃi] (夏)、[kiʔku] (菊)、[ʃiʔmo] (霜)、[tʃiʔka] (柄)、[hyʔʃi] (縁)、[ʃiʔki] (肩)、[ʃiʔn] (隅)、[kaʔni] (錢)、[ʔaʔbu] (虻)、[hiʔru] (蛭)、[taʔte] (昼)、[tʃiʔkə] (使)、[maʔki] (額)、[ʔuʔtu] (夫)、[ʃiʔmē] (終り)、[kaʔki] (垣)、[juʔwa] (四日)、[tʃiʔdʒi] (峠)、[kaʔda] (匂い)、[ʔuʔtu] (便り)

((○●、○○▶))

[saʔbi] (鏽)

ㄱ/ (●●●、●●●▷)

[ʔdaː] (何処)、[ʔkiː] (木)、[ʔkuː] (粉)、[ʔtaː] (田)、[ʔtiː] (手)、[ʔnaː] (業)、[ʔniː] (荷)、[ʔΦiː] (屁)、[ʔ\*huː] (穂)、[ʔmiː] (目)・(芽)、[ʔwaː] (輪)、[ʔkai] (粥)、[ʔkʰul] (杭)、[ʔkuː] (穀)、[ʔʔaː] (垢)、[ʔmai] (尻)・(後)、[ʔteː] (丈)、[ʔnun] (蚤)、[ʔkoː] (皮)、[ʔtai] (鯛)、[ʔʔui] (瓜)、[ʔkju] (今日)、[ʔʃiː] (鞞)、[ʔnuː] (何)、[ʔhai] (針)、[ʔtʃʰiː] (乳)、[ʔʔai] (鮎)・(藍)、[ʔkui] (鯉)、[ʔkʰui] (声)、[ʔtsʰui] (一人)

(●●●、○●●▷)

[ʔjaː] (家)

(○●●、●●●▷)

[ʔʃiːra] (面)、[duːʔ] (我)・(己)、[kiːn] (着物)

(○●●、○●●▷)

[ʔyʃi] (砥)、[miːno] (箕)、[juːʔ] (湯)、[ʃiːma] (国)、[ʃiːba] (芝)、[ʃiːwa] (皺)、[ʔiːru] (紐)、[hyʃi] (星)、[maːtu] (的)、[jaːma] (森)、[ʔaːda] (痣)、[kyʃi] (串)、[kuːra] (鞍)、[tʃiːma] (褻)、[ʃiːdʒi] (業)、[kaːdu] (門)、[syʃtu] (外)、[ʔaːtʃa] (明日)、[ʔaːmi] (網)、[ʔiːki] (池)、[jaːʔ] (家)、[ʔiːru] (色)、[ʔuːdʒi] (蛆)、[ʔuːdi] (腕)、[ʔuːni] (畝)、[ʔuːra] (裏)、[ʔuːni] (鬼)、[wʊːja] (親)、[kaːmi] (神)、[kiːmu] (肝)、[kyʃsa] (草)、[kuːdʒi] (靴)、[kuːmi] (組)、[kuːra] (倉)、[kyʃtu] (事)、[kuːmi] (米)、[saːo] (竿)、[ʃiːba] (舌)、[ʔuːsu] (潮)、[ʃiːma] (島)・(田舎)・(相撲)、[ʃiːmi] (標)、[ʃiːmi] (炭)、[suːmi] (墨)、[sʰku] (谷)、[tʃiːki] (月)、[nʔʃa] (土)、[tʃiːna] (綱)、[tʃiːno] (角)、[duːku] (毒)、[ʔyʃi] (年)、[naːmi] (波)、[nuːka] (糠)、[nuːi] (海苔)、[hʰka] (墓)、[hʰke] (刷毛)、[haːdʒi] (恥)、[baːtʃi] (撥)、[haːna] (花)、[waːta] (腹)、[haːri] (晴れ)、[ʰhuʃi] (節)、[maːta] (股)、[jaːma] (山)、[juːmi] (弓)、[ʔiːmi] (夢)、[waːku] (粹)、[waːta] (錦)、[ʔaːsa] (麻)、[miːʔ] (孔)、[mʰjaːʔ] (貝)、[kyʃsu] (糞)、[kuːmo] (雲)、[taːma] (玉)、[maːi] (後)、[maːmi] (豆)、[ʔuːmi] (膿)、[ʔiːta] (板)、[ʔiːtu] (糸)、[ʔiːni] (稻)、[joːʔ] (擢)、[kʰsa] (笠)、[kʰʃi] (槽)、[kaːdu] (角)、[kiːnu] (絹)、[kaːma] (鎌)、[ʔiːru] (錐)、[guːmi] (屑)、[ʃiːru] (汁)、[suːba] (側)、[taːni] (種)、[naːʔ] (中)、[naːi] (苗)、[nuːmi] (鑿)、[haːda] (肌)、[miːsu] (味噌)、[miːno] (蓑)、[muːgi] (麦)、[waːna] (罌)、[waːra] (藁)、[hyʃka] (他)、[ʔaːsi] (汗)、[ʔaːmi] (雨)、[wʊːgi] (黍)、[maːdu] (窓)、[mʰʔ] (前)、[maːju] (藺)、[ʔwiːʔ] (上)、[ʔaːy] (青)、[miːʔ] (兄)、[ʃiːru] (白)、[sʰke] (鮭)、[taːti] (縦)、[kyʃtʃi] (東)、[sʰku] (谷間)、

[tʃiːdʒu] (唾液)、[ʔuːsu] (潮)、[səːkə] (境)、[kiːnu] (昨日)、[niːgə] (願い)、  
[ʔuːi] (胡瓜)、[naːda] (涙)、[daːgu] (団子)、[haːda] (裸)、[kʏːsu] (辛子)、  
[taːre] (盥)、[haːte] (畠)、[jaːmi] (病)

(●●、●○▷)

[ɾmʔaː] (馬)、[ɾʔun] (海)

(●○、●○▷)

[noːʃi] (熨斗)、[ʔaːkʔi] (秋)、[tʃiːju] (露)、[nuːʃi] (主<sup>あるじ</sup>)

(○●、●○▷)

[kuːru] (黒)

## II. 3音節型

(●●●、●●●▶)

[ɾsaːgi] (鷺)、[ɾkiːba] (牙)、[ɾhanta] (岸)、[ɾtʃiggjo] (井戸)、[ɾkəʔatʃi] (形)、  
[ɾʃoːdʒi] (障子)、[ɾjoːka] (八日)、[ɾtʔaːtʃi] (二つ)、[ɾjuːtʃi] (四つ)、[ɾmuːtʃi] (六つ)、  
[ɾjaːtʃi] (八つ)

(○●●、○●●▶)

[kʏːmui] (薦<sup>こも</sup>)、[nuːrin] (縁<sup>はた</sup>)、[ʔuːdui] (舞)、[niːgiri] (右)、[noːːdʒi] (虹)、  
[maːgai] (脛)、[maːdʒun] (蛇)、[niːdan] (値)、[ʔiːwəʃi] (鯛)、[ʔuːruʃi] (漆)、  
[kaːdʒai] (飾)、[kəːtsuo] (鯉)、[kiːbuʃi] (煙)、[kʏːtuʃi] (今年)、  
[səːkura] (桜)、[ʃiːruʃi] (印)、[tuːnai] (隣)、[tuːmai] (泊り)、[niːgutu] (寝言)、  
[nuːdzumi] (望み)、[haːnadʒi] (鼻血)、[hʃiːtʃidʒi] (羊)、[jaːgura] (槽<sup>やぐら</sup>)、  
[waːtai] (渡り)、[nuːbui] (昇り)、[həːtʃika] (二十日)、[hʏːtʃika] (二日)、  
[miːkjaː] (三日)、[muːika] (六日)、[miːjako] (都)、[ʔuːdui] (踊り)、  
[ʔaːdʒiki] (小豆)、[kəːtaki] (敵<sup>かたき</sup>)、[ʃiːgata] (姿)、[maːkʏtu] (誠)

(○●●、○●●▷)

[niːgui] (根)、[həːton] (機)、[gaːtʃin] (鱒)、[ʔiːtʃin] (何時)、[ʔaːoi] (葵)、  
[ʔiːkjai] (錨)、[ʔuːgai] (嗽い)、[kuːtui] (小鳥)、[kiːnuki] (毛抜き)、  
[kaːgan] (鏡)、[tʃiːtʃin] (包)、[ʃiːkjai] (光り)、[taːʃiki] (襷)、[ʃiːdzai] (左)、  
[ʃiːran] (虱)、[suːmomo] (李)、[kʏːsui] (薬)

(○○●、○●●▷)

[ʔawaːse] (袷)、[ʔuraːmi] (恨)、[ʔumuːti] (表)、[hʏtʃiːma] (衾)

(○○●、○○●▷)

[toːgə] (鋏)、[jamːmē] (庭)、[guʃiːko] (城)、[saːki] (櫛)、[ʔanːdʒa] (下駄)、  
[miːmaːju] (眉)、[kumːma] (車)、[joːːne] (今宵)、[juduːmi] (涎)、  
[joroːi] (鎧)、[mēːre] (嫁)、[ʔunaːgu] (女)、[kujuːmi] (曆)、[takaːra] (宝)、

[tamiꞑʃi] (験<sup>ためし</sup>)、[hakaꞑma] (袴)、[muꞑʃu] (席<sup>むしろ</sup>)、[jiꞑga] (男)、[ʔituꞑma] (暇<sup>いとま</sup>)、[ʔumuꞑi] (思い)、[ʔitʃiꞑka] (五日)、[kanꞑna] (鉤<sup>かんな</sup>)、[sadaꞑmĩ] (定め)、[sudzuꞑri] (硯)、[taʃiꞑki] (助け)、[tamꞑbi] (頼み)、[tʃiꞑtuꞑmi] (勤め)、[nagaꞑri] (流れ)、[nagꞑka] (七日)、[wakaꞑri] (別れ)、[ʔitʃiꞑtʃi] (五つ)、[ʔinuꞑtʃi] (命)、[kyꞑkuꞑru] (心)、[nasaꞑki] (情)、[nasuꞑbi] (茄子)、[çitoꞑe] (単衣)、[makꞑk²wa] (枕)、[ʔamꞑba] (油)、[ʃidaꞑri] (簾<sup>すだれ</sup>)、[kaiꞑko] (蚕)

((●●○、●●○▷))

[jiꞑdʒi] (絵)、[ʔaꞑk²a] (姉)、[k²aꞑki] (柿)、[ʃiꞑgi] (杉)、[tiꞑru] (籠)、[guꞑma] (胡麻)、[kaꞑmĩ] (瓶)、[suꞑʃi] (鮭)、[haꞑma] (浜)、[maꞑru] (鞠)、[ʔaꞑtu] (跡)、[ʔiꞑki] (息)、[ʔuꞑʃi] (臼)、[mikꞑk²wa] (姪)、[kaꞑdʒi] (数)、[ʃiꞑdʒi] (筋)、[tʃiꞑmi] (罪)、[m²jaꞑʃi] (箸)、[ʰhuꞑni] (舟)、[tʃitꞑtʃi] (槌)、[kaꞑgi] (蔭)、[saꞑru] (猿)、[taꞑbi] (足袋)、[ʔaꞑka] (赤)、[hoꞑki] (箒)、[haꞑra] (柱)、[biꞑkja] (蛙)、[dʒiꞑki] (芒<sup>すすき</sup>)、[mĩꞑda] (蚯蚓)、[huꞑtʃi] (蓬)、[ʔutꞑtu] (大人)、[ʰiꞑha] (広さ)、[gunꞑdʒa] (鯨)、[kuꞑma] (卵)、[t²iꞑtʃi] (一つ)

((●●○、○●○▷))

[haꞑtʃi] (鉢)

((○●○、○●○▷))

[maꞑsu] (塩)・(枅)、[maꞑku] (幕)、[waꞑki] (腋)、[jaꞑdu] (宿)、[naꞑbĩ] (鍋)、[ʃiꞑkaꞑma] (朝)、[muꞑkaꞑʃi] (昔)、[kaꞑwaꞑra] (河原)、[kaꞑtaꞑna] (刀)、[kyꞑtuꞑba] (言葉)、[muꞑŋꞑkja] (族<sup>ゝかり</sup>)、[ʔuꞑdʒiꞑra] (鶉)、[ʃiꞑraꞑgi] (白髪)、[ʃiꞑbaꞑʃi] (火箸)、[ʔaꞑwaꞑri] (哀れ)、[ʔuꞑsaꞑgja] (兎)、[ʔuꞑnaꞑgi] (鰻)、[niꞑdʒiꞑmi] (鼠)、[tsuꞑbaꞑme] (燕)、[naꞑgaꞑha] (長さ)、[ʔiꞑtʃiꞑubi] (苺)、[tʃiꞑdzuꞑja] (千鳥)、[tʃiꞑbaꞑki] (椿)、[naꞑmaꞑri] (鉛)

((●○○、●○○▷))

[ʔaꞑnda] (端)、[ʔuꞑbu] (指)、[k²waꞑgi] (桑)、[m²aꞑga] (孫)、[ʔaꞑdʒa] (父)、

[k²juꞑbi] (帯)

### Ⅲ. 4 音節型

((●●●●、●●●●▷))

[ꞑkidʒibai] (酢)、[ꞑaꞑjone] (宵)

((○●●●●、○●●●●▷))

[ʃiꞑbiwari] (鞍<sup>ウマ</sup>)、[ʔiꞑtʃimma] (常)、[moꞑiꞑʃitsu] (骸)、[kyꞑʃibira] (背中)

((●●●●●、●●●●●▷))

- [ɾʔo:buku] (泡)、[ɾʔintʃin] (雲雀<sup>ひばり</sup>)  
 ((●●●●、○●●●▷))  
 [ʔiɾʔiŋka] (何れ)、[ʔaʔu:sa] (緑)  
 ((○○●●、○○●●▷))  
 [kuraɾʃin] (闇)、[tidaɾʔiɾ] (日照り)  
 ((○●●○、○●●○▷))  
 [ʔuɾʔakʔkʔwa] (親子)  
 ((○○●○、○○●○▷))  
 [maŋɾguʔha] (蜘蛛)、[janɾduʔra] (雀)  
 ((●●○○、●●○○▷))  
 [ʔuŋʔgiba] (汀<sup>みぎわ</sup>)  
 ((○●○○、○●○○▷))  
 [haɾdaʔʃin] (跣足)

## IV. 5 音節型

- ((●●●●●、●●●●●▶))  
 [ɾju:ʃimun] (啞)  
 ((○●●●●、○●●●●▶))  
 [saɾbanʔjuɾ] (鯖)、[ʔiɾʃiburu] (巖<sup>いわお</sup>)  
 ((○○●●○、○○●●○▷))  
 [ʔasaɾʔiɾda] (朝日)  
 ((○○○●○、○○○●○▷))  
 [ʔunaguɾdaʔʃi] (寡婦)、[jinggaɾnuʔkʔwa] (息子)

## V. 6 音節型

- ((○○●●○○、○○●●○○▷))  
 [ʔusɾsuŋʔmun] (類<sup>たぐい</sup>)

以上に述べた山方言の名詞アクセントと、本土の代表方言のアクセントとの対応は、次のとおりである。

九州方言と比較してみると、鹿児島方言とは、3・4・5類において一致し、大分方言とは、1・2類において一致していることがわかる。

表-2 山方言の名詞アクセント対応表

類	語例	山方言	大分方言	鹿児島方言	東京方言	京都方言
1	風	kaɽdi	kaɽze	kaɽze	kaɽze	ɽkaze
2	紙	kaɽbi	kaɽmi	kaɽn	kaɽmi	kaɽmi
3	花	haɽna*	haɽna*	haɽna	haɽna*	haɽna
4	稲	ɽiɽni*	iɽne	iɽne	iɽne	iɽne
5	雨	ɽaɽmi*	aɽme	aɽme	aɽme	aɽme*
1	子が <sup>ɽ</sup>	ɽkɽwaɽnu	koɽga	koɽga	koɽɽga	ɽko:ɽga
2	葉が <sup>ɽ</sup>	ɽha:ɽnu	haɽga	haɽga	haɽɽga	ha:ɽɽga
3	木が <sup>ɽ</sup>	kiɽnu	kiɽga	kiɽga	kiɽɽga	ki:ɽɽga

[注\*] 山方言の3・4・5類は、1・2類と同様に尾高であるが、第2音節の次に「さがりめ」がある／○○○／ことによって、「さがりめ」のない1・2類と区別される。

大分方言の3類は、1・2類と同様に尾高であるが、山方言の3・4・5類と同じく、第2音節の次に「さがりめ」があることによって区別される。

東京方言の(2・3類)対(1類)の関係もこれと同じ。

京都方言の5類は、4類と同様に尾高であるが、5類は第2音節内部に「さがりめ」がある／○○○／ことによって、「さがりめ」のない4類と区別される。

#### 4. 分析と考察

得られた調値より、語数の多いものをその型の代表として整理し、名義抄式アクセントとの対応関係を示せば、次のとおりである。

1・2類	: ○● ~ ○●▶
3・4・5類	: ○● ~ ○●▷

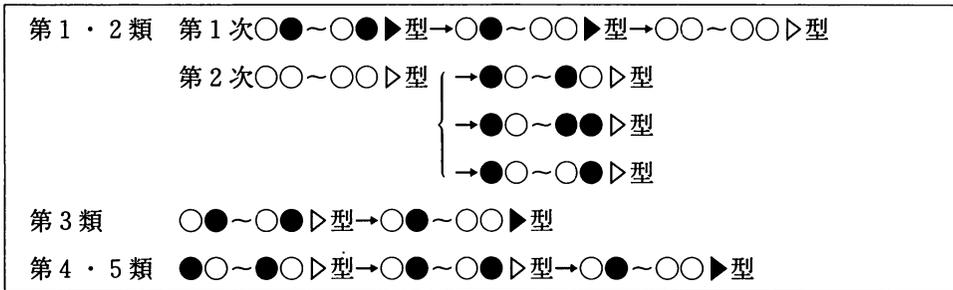
したがって、山方言における壮年層のアクセントは、(1・2類)(3・4・5類)の二型アクセントであると言える。

これと崎村(1982)・(1983)とを比較してみると、以下のことがわかった。

- (1) 山方言と同じ北西部方言の天城町松原方言(インフォーマントは老年層)と比べると、三型と二型の違いがあり、また調値も1・2類を除いて異なる。3類が○●~○●▶であるが、この調値は山方言にはない。
- (2) インフォーマントが、同じ壮年層である徳之島町亀徳方言と比べると、三型と二型の違いが見られる。3類を○●~○●▷と見なしているが、第2音節内部に「さがりめ」がある点で異なる。

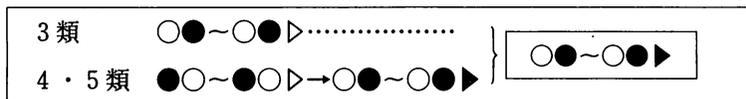
金田一(1960)では、琉球方言の2音節名詞のアクセントの変容過程を、以下のように推

則している。



この図と天城町松原方言、徳之島町亀徳方言、それに山方言とを比較・検討した結果、以下のことがわかった。

- (1) 天城町松原方言は、1・2類、4・5類が琉球方言アクセントの母体系の原型を保っている。3類の○●～○○▷は、○●～○●▷型から変化した○●～○○▷型の異種と見なすことができる。
- (2) 徳之島町亀徳方言は、3類の○●～○●▷を○●～○●▷型の異種と見なせば、1・2類、3類、4・5類がすべて琉球方言アクセントの母体系の原型を保ち、古色を残していると言える。
- (3) 山方言の場合、1・2類、3類は琉球方言アクセントの母体系の原型を保ち、4・5類のみ○●～●○▷型から○●～○●▷型へと変化している。つまり、次の図のように母体系の4・5類は、山を次へ動かして母体系の3類と統合したと考えられる。



この、1・2類が母体系の原型を保ち、4・5類が3類と統合する変化の仕方は、八重山群島においては鳩間方言に類似している。

さらに、崎村(1982)所載の「琉球諸方言アクセントの系譜・奄美群島篇」を参照すれば、山方言の壮年層のアクセントは、山式から奄美南部方言の屋鈍式に推移した型に一致することがわかった。

したがって、山方言の壮年層のアクセント体系は、古色を保ちながら4・5類が3類に統合した、三型アクセントが二型アクセントへと変化したものであると言える。

## おわりに

音韻体系においても、中舌母音の変容によってかなりの変化が見られる徳之島方言であるが、アクセント体系においても三型アクセントの二型化というあおりを受けていることがわかった。

将来、この傾向は全島的に見られることが予想される。しかし、この傾向が琉球方言独自の変化に基づくものか、あるいは九州方言の影響等によるものかを明らかにする必要がある。

今後の課題として、次の3点を掲げておきたい。

- (1) 徳之島方言アクセントの総合的調査と比較研究
- (2) 奄美方言アクセントとの比較研究
- (3) 琉球方言アクセントの母体系についての検討・再構築

尚、本稿を成すに当り、東京都立大学教授の中本正智先生に種々の御教示を賜わった。ここに記して感謝申し上げたい。

### 参 考 文 献

- (1) 平山輝男 (1937) 「アクセントから見た琉球方言の系統」(『方言』第7巻第6号)
- (2) 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』岩波書店
- (3) 服部四郎・上村幸雄・徳川宗賢 (1959) 「奄美諸島の諸方言」(九学会連合奄美共同調査報告書『奄美』)
- (4) 上村孝二 (1959) 「奄美方言のアクセント——沖永良部、徳之島の部——」(『鹿児島大学文科報告』第8号)
- (5) 金田一春彦 (1960) 「アクセントから見た琉球諸島方言の系統」(『東京外国語大学論集』第7号)
- (6) 柴田武 (1960) 「徳之島方言の音韻」(『国語学』第41号)
- (7) 平山輝男・中本正智 (1964) 『琉球与那国方言の研究』東京堂
- (8) 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966) 『琉球方言の総合的研究』明治書院
- (9) 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究——原理と方法——』塙書房
- (10) 中本正智・内間直仁・野原三義 (1979) 『琉球の方言——奄美徳之島井之川——』法政大学沖縄文化研究所
- (11) 崎村弘文 (1981) 「徳之島の方言(1)——伊仙町目手久方言の実態——」(『鹿児島大学文科報告』第17号)
- (12) ————— (1982) 「徳之島の方言(2)——天城町松原方言の実態——」(『鹿児島大学文科報告』第18号)
- (13) ————— (1983) 「徳之島の方言(3)——徳之島町亀徳方言の実態——」(『鹿児島大学文科報告』第19号)
- (14) 柴田武編 (1984) 『奄美大島のことば——分布から歴史へ——』秋山書店
- (15) 橋尾直和 (1986) 『奄美徳之島方言の音声・音韻の研究——音響学的研究方法等に従って——』鳴門教育大学言語系国語学研究室

(東京都立大学研究生)